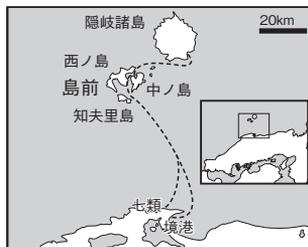


③

隠岐島前おき どうぜん（島根県海士町ほか）—— 隠岐島前高等学校

未来を変える島の学校 「島前教育魅力化プロジェクト」

海士町総務課 濱中 香理



隠岐島前：島根半島の北東約60km、隠岐諸島南西部にある3島からなる地域。かつては、焼火山を中心としたひとつの島だった。中ノ島の海士町、西ノ島の西ノ島町、知夫里島の知夫村からなる。面積は約100km²、人口は約5,840人（平成27年5月現在）。

● 島前地域三島唯一の高校、隠岐島前高校

隠岐諸島の島前地域は、西ノ島町（西ノ島）、海士町（中ノ島）、知夫村（知夫里島）の三町村から構成されており、海士町に位置する島根県立隠岐島前高等学校（以下、島前高校）はその地域で唯一の高校です。

平成一二年頃までは七〇名前後いた入学人数も、同二〇年には二八名にまで落ち込むなど、生徒数は減少の一途をたどっていました。島根県の県立高校の基準では入学人数が二一名を切ると統廃合検討の対象となりますが、このままいけば五年の間にその対象となることが確実視されていました。

地域から高校がなくなると、島前の子どもたちは中学校

卒業と同時に進学のため島を離れなければなりません。それだけではなく経済的に余力のない家庭は、家族ごと島を離れるケースも考えられます。人口流出がさらに加速するため、学校の存続は地域の存続に直結する問題でした。

● ひとりの若者との出会い

当時、海士町役場の財政課長であった吉元操は、島前高校の存続問題を大きな危機として捉えていましたが、役場に県立高校の部署があるわけでもなく、なかなか突破口を見つけられずにいました。平成一八年から、海士町ではAMAWゴンという大学生との交流事業を行っており、その交流の中で岩本悠という若者（現、島根県教育魅力化特命官）との出会いがありました。岩本は当時ソニーで人材育成に



隠岐島前高校（中央）は中ノ島にある。西ノ島（右奥）と知夫里島（左奥）との3島で島前地域を構成する。

携わっていた人物です。彼は「島前高校は本土のような進学校を目指すのではなく、島の地域資源を活用して人間力や志を高めながら、将来社会や地域を元気にするために活躍できる人づくりを目指すべきだ」と吉元にアドバイス。吉元はこの言葉に大きく感銘を受け、この島で一緒にやらないかと岩本に猛烈なオファーをかけます。岩本はとても困惑しましたが、この地域を変えることができれば日本や

社会全体も変えることができるのではないかと考え、島への移住を決断します。こうして島前高校の未来と存続をかけたプロジェクトが産声を上げることになりました。

● 地域との協働による

「島前高校魅力化プロジェクト」始動

当初「高校の存続」を目指してスタートしたプロジェクトですが、岩本は「存続」という言葉に違和感を持っていました。「存続」を掲げれば掲げるほど、むしろ生徒や保護者が離れていく感覚がありました。生徒が「行きたい」、保護者も「行かせたい」、地域も「活かしたい」、教員も「赴任したい」という魅力ある学校づくりが必要でした。

そんな島前ならではの魅力ある学校づくりを目指すため、岩本は島前三町村と学校をつなぐ仕組みを考えました。当時、高校には部活動遠征費などの財政的な支援を行う「後援会」組織がありました。が、活動はあまり活発ではありませんでした。しかしその中には、島前三町村の町村長、議長、教育長、中学校長



「AMAワゴン」は平成18年にスタートした都市農村交流事業。都市の若者を海士町に迎え、高校や中学校で出前授業を実施してもらった。

などの関係者が名を連ねていたこともあり、この組織を見直して活かすことを考えました。

そして平成二〇年に「隠岐島前高等学校の魅力化と永遠の発展の会」（魅力化の会）という組織が立ち上がりました。また翌年には下部組織として、高校教員と三町村職員、中学校教員、保護者、卒業生などで構成される「隠岐島前高等学校魅力化推進協議会」（推進協議会）も立ち上がりました。こうして、地域との協働により島前高校の魅力化を目指す

「島前高校魅力化プロジェクト」がスタートしました。

プロジェクトでは、大きく二つの指標を掲げました。島前三町村からの生徒の入学率の向上と島外からの入学者数の増加です。またワーキンググループによる共通ビジョン策定や地域との協働を推進する「魅力化コーディネーター」を校内に配置する仕組みもつくり、岩本自身もコーディネーターとして、学校に籍を置きながら教員とともに活動を行ないました。さらには、島根県の教育委員会に働きかけ、学校と地域をつなぐ「社会教育主事」の高校派遣の体制も整えました。そのような体制の中で、島だからこそできる「魅力ある」教育づくりを整えていきました。

●地域課題解決型学習「地域学」

島前ならではの教育の魅力とは何でしょうか？ 人口減少、超少子高齢化、後継者不足、財政難など、一見問題だ

らけの地域ですが、じつはこれこそが島前ならではの教育の魅力ともいえます。このような日本や世界の重要課題の最前線といえるこの地で挑戦したり学んだりすることができれば、それは必ず日本や世界の未来を切り拓く力となります。島前高校では平成二三年から、地域課題を学んで解決策を考える「地域学」などの授業を開始しました。教室だけではなく島前三島に出かけ、地域に実在する課題を体感しながら現場での実践を行う授業です。

また、「ひと」を観光資源と捉えた体験型観光プランの計画とツアアの実践を行う「ヒトツナギ」など、地域に根ざした活動にも取り組み始めました。ヒトツナギは平成二一年に行われた「第一回観光甲子園」に出場、グランプリとなる文部科学大臣賞を受賞することができました。その後も世界唯一の部活動として、現在も継続的に活動しています。

●高校連携型の公立塾「隠岐國学習センター」

高校の魅力を高めるためには、地域との連携を強化するほかに、やはり学力向上と進路実現に向けた体制強化が必要です。地域に複数の高校があるような都市部では、学力や進路希望に合わせた高校選択ができます。しかし島前高校のように地域唯一の高校では、学力の高い生徒も低い生徒も同じ教室で学ぶこととなります。学力差が著しい生徒



地域課題解決型学習の一環で、外国人観光客向けの観光プランを考えたと。



島前3町村の首長を前に、高校生が直接プランを提案する機会もある。



ヒトツナギは平成21年に行われた「第1回観光甲子園」でグループとなる文部科学大臣賞を獲得。

たちの指導を高校が一手に担うことになりましたが、教員の数も限られ十分な指導を行うことがなかなか難しい状況でした。そこで、高校と連携して生徒や教員を支援する公立塾「おきくに隠岐国学習センター」を平成二二年に立ち上げました。隠岐国学習センターでは、生徒自らが目標や計画を立て勉強できるようにする「自立学習支援」と、生徒の夢や将来のやりたいことを明確にし、進路実現や学習に対しての意欲を高めるための対話型授業「夢ゼミ」が行われています。設立当初は一〇名だった受講生も現在では全生徒の八

割となる約一四〇名が通うほどになりました。空き家を利用しての運営を続けていましたが、平成二七年には築一〇〇年の古民家を増改築した新学舎が整備され、夜遅くまで熱心な指導が行われています。

● 全国から多彩な生徒を募集する「島留学」

島前のような離島地域では、地元の子どもたちはクラス替えを経験することなく、限られた人間関係の中で育ちます。どうしても価値観や関係性、役割が固定化し、刺激や

競争意識が不足しがちとなるのが課題でした。そうした状況を打破するために平成二三年に、島外から意志ある生徒を募集する「島留学」を開始しました。

親元を離れて寮生活を行う島留学生に対しては、身元引受人として地域の有志の方々に「島親」となってもらう制度をつくり、島の伝統文化や生活に触れる機会を設けたり、地域と生徒を結ぶ役割を担ってもらっています。また島留学生は地元生と異なり、里帰りの際に多くの費用がかかるため、帰省実費の半額を補助する「里帰り交通費補助金」などを整備しています。

当時はあまり注目されず、東京や大阪で説明会を開いても数人しかこないような状況でしたが、島前高校魅力化プ



平成27年に古民家を増改築して整備された「隠岐国学習センター」の新学舎。



隠岐国学習センターで実施されている対話型授業「夢ゼミ」の光景。

ロジエクトの取り組みが充実し、メディアに取り上げられるようになると、島外からの問い合わせが数百件を超えるようになりました。

平成二三年には、島根県教育委員会にて島前高校の募集定員を一クラス四〇名から二クラス八〇名へ増やすことが決定され、島留学生の入学者数も年々増加するようになりました。

●未来のつくり手「グローバル人材」の育成

島前高校は平成二七年に、離島の学校としては全国で初めて文科省のスーパードグローバルハイスクールに認定されました。これまでは「地域学」「ヒトツナギ」など、「飛び出す機会」の充実を図っていましたが、それに加えて「地域」を「飛び出す機会」も充実させつつあります。

平成二六年からは、二年生全員を対象にシンガポール研



島前高校の島留学は平成22年に開始。今では生徒のおよそ半数が島留学生となっている。

◆島前教育魅力化プロジェクト①◆

■島前でのICT活用による教育の魅力化

島前教育魅力化プロジェクトでは、教育のICT活用も積極的に実践しています。島前高校にはLTE回線がついたiPadが50台設備されており、調べ学習やアクティブ・ラーニング（学修者が能動的に学修することによって、汎用的能力の育成を図るもの）への活用が始まっています。また普通教室には60インチの液晶ディスプレイが設置されています。iPadの画面をディスプレイに表示しての指導や、ディベートの際に相互の資料を表示するなどに使われています。特にディベートでは、相手の資料を見据えて反論の根拠をすぐにiPadで調べ、資料を随時更新していく独特の学習が行われており、これからの時代に必要な「情報編集力」の育成に寄与しています。

隠岐國学習センターにも同じくLTE回線付iPadが40台設備されています。高校同様に調べ学習でも使われていますが、その他「英会話（フィリピン的大学生と接続）」「卒業生による質問対応（遠隔授業システム）」「ウェブドリル」でもiPadが活躍しています。定期テスト期間中、普段より多くの質問が学習センターには寄せられるのですが、卒業生を組織化し遠隔で質問対応にあたってもらっています。先輩たちがICTの力を借りて後輩たちを遠隔指導してくれることで、試験中の質問の多い時期も生徒たちは困ることがなく、大学生がいない島前地域では本当に助かっています。また島前3つの島に住む中学生に対して英・数・国の遠隔授業を配信しており、基礎学力の向上の役割を担っています。

島前高校の男子寮としても使われている島前研修交流センター「三燈（さんとう）」には、遠隔地と空間をつなぐ「Smooth Space（スムーズスペース）」が設備されています。これは幅4m、高さ2mのスクリーンが2枚L字型にレイアウトされており、あたかも向こう側とつながった一つの空間をつくりだすシステムです。このシステムを使って宮崎県立飯野高校（えびの市）と定期的に遠隔授業を行っており、相互に地域課題プロジェクトの活動報告や情報共有・意見交換をしています。この学習プログラムにより、近視眼的になりがちな地域課題についても、広い視点で取り組む姿勢が生徒たちに芽生えているのを感じています。

（島前教育魅力化プロジェクト 教育ICTディレクター 大辻雄介）

修を行っています。島前地域は世界一のド田舎モデルを目指す島ですが、シンガポールはその対極にある世界的な都市型モデルの島です。真逆の価値観、環境に入ること、自分たちの島の魅力や課題、可能性に気づくことができま

平成二八年からは、希望生徒を対象にブータン、ロシア、エストニアなどの海外でのプログラムも実施しています。「田舎センス／都会センス」「ローカル／グローバル」の両方の価値観を体感することで、地球視点で考えながら地域で実践できたり、逆に地域のことを考えながら地球規模で

活躍できる未来のつくり手「グローバル人材」の育成を目指しています。

●ICTの積極活用による地理的ハンディの解消

島前高校は離島の学校のため、島外との交流が簡単にはできません。その機会創出のためにICTの活用も積極的に進めています。平成二八年度にはNTT西日本と連携し、島前研修交流センター「三燈」にL字型の大型スクリーン「スムーズスペース」を整備しました。スクリーンには等身大の映像が映し出されるため、あたかも向こう側に相手



2年生全員が海外研修としてシンガポールのYale-NUSカレッジを訪問。



今年度から希望者を対象に「幸せの国」ブータンでの短期プログラム研修を実施。



島前研修交流センター「三燈」に整備されたスムーズスペース。スクリーンの中に他高校の教室があるように投影することで、一体感のある合同授業を行うことができる。

の教室があるように映り、臨場感のある合同授業を行うことができます。パートナーとなる宮崎県えびの市の県立飯野高校にも同様の設備があり、定期的に交流授業を行いながら、お互い学んだ地域課題解決プランなどの発表や意見交換を行っています。

●生徒の半数が島外からの留学生に

島前高校魅力化プロジェクトがスタートした平成二〇年には八八名だった全校生徒数ですが、同二六年には一五六名となり、念願の全学年二クラス化も実現するなど、生徒

数・クラス数とも倍増しました。島留学生の定員は全体の三〇パーセントである二四名に定めていますが、いまでは入学希望者数が二倍を超えるまでになりました。かつては四五パーセントと低かった

地元中学校からの進学率も、今では七〇パーセント以上に高まっています。

平成二四年には、かつてより国に訴え続けてきた高校校標準法（詁）の改正も実現。離島における教育の特殊事情の中で教職員定数の加配が認められ、教員数も倍増しました。

今では島前高校の生徒のほぼ半数が、島外から来た島留学生です。北は北海道から南は宮崎県まで二三の都道府県、さらには海外（ドバイや上海）からの帰国子女など、多種多様な生徒が集まっています。島内生と島留学生の関係は、最初は価値観の違いからギクシャクする時期もありますが、そのうち互いの価値観を認め合うようになり、「人間関係がどんどんつながって環^わになっていく。これまで味わったことのない楽しさがある」「考え方が違うものどうし理解しあうことで世界が広がり、まるで自分の中の壁が消えたみたいな感覚を味わった」といった生徒の声も聞かれるようになりました。

進路や卒業後の進路にも変化が生まれました。「三〇歳で島に戻り、町長になってこの島を幸福度が高い世界のモデルとなる町にしていきたい」「島内外の人と人をつなぐカフェレストランを起業する」など、夢に向かって進路を選択する生徒が増加し、国公立大学や私立大学への進学も増えました。

入居者が少なく赤字で苦しんでいた寮は、平成二五年に

は定員を満たし、入寮できない生徒も出始めました。島前研修交流センター「三燈」は、海士町が整備した長期宿泊型施設です。現在は島留学の男子生徒が住む「島家」として活用されており、生徒による自主運営が行われています。

※註 高校標準法・公立高等学校の適正配置及び教職員定数の標準等に関する法律。学級規模と教職員配置の適正化を図るため、その標準について必要な事項を定めるもの。平成二四年の離島振興法改正と同時に、離島における教育の特殊事情に鑑み、離島地域の高等学校の教職員定数について政令で定める数を加算する旨が附則に追加された。

●次なる挑戦—— 持続可能な高校から持続可能な島前地域へ

これまでの「魅力化」は高校のみに焦点を当てていましたが、今後は島前の教育と島前地域全体の魅力化も視野に入れた取り組みにしていかなければなりません。高校が輝きを取り戻しても、島前が沈んでしまえば意味がありません。地域に根ざし地域をともにつくる学校として、保育園から高校までの連携を推進し、地域の未来をつくる人づくりと教育の魅力化に取り組みつつ、島前地域そのものの魅力化にも寄与していきたいと考え、本年度からプロジェクト名を「島前教育魅力化プロジェクト」に改称しました。

新たな取り組みとしては、島前三町村による「小中学校



地域の有志の方々には留学生の「島親」となってもらっている。留学生と島親の交流バーベキューの様子。

魅力化」の動きがスタートしています。西ノ島町、海士町、知夫村のそれぞれにある小中学校の特性を活かした「教育の魅力化」を目指し、小中学校での「島留学」(一、二年の短期留学)の取り組みも各町村の教育委員会が中心となって進めています。

島前のような過疎地域にもっとも不足しているのは、子どもを生み育てる二十歳代から四十歳代までの層であり、この子育て世代が定住において重視することのひとつが「教育」です。島前地域全体が未来の地域を担うひとつくりを行う「教育の島」となることで、こうした子育て世代

の流出を食い止め、逆に子育て世代のUIターンを促進することができれば、島前地域の持続可能性は高まり、そのことが島前高校の持続可能性の強化にもつながっていくものと考えています。

●教育によるシステムチェンジ、教育による地方創生へ

これまでの教育は、高度経済成長が進む中、全国どこでも同じ教育を受けることができる「標準化」の流れの中で進められてきました。そうした教育が生み出していたのは「都会の担い手」の育成と輩出でした。結果、地方では「子どもの流出」と「担い手不足」が生まれ、「過疎化」と「少子高齢化」「文化の衰退」が加速しました。

高度経済成長社会が終わりを迎え、これからは持続可能な社会が求められています。その地域でしかできない教育の魅力化を進めていくことで、地域の担い手の育成と輩出ができれば、地方での「子ども／子育て世代の流入」と「担い手確保」にもつながります。結果、地方の持続可能性は高まり、文化の継承も図られていきます。

高度成長社会の価値観の中では最後尾を走っていた島前地域であり島前高校ですが、これからの持続可能な社会が求められる時代においては、日本や世界を先導する「タグボート(曳船)」として最先端を走っていく存在になれるよう、これからも突き進んでいきたいと思えます。

◆島前教育魅力化プロジェクト②◆

■離島留学と教育魅力化

島前高校が「島留学」に取り組み、多くの島外生を迎える形ができてきた。そのような中、島前3町村の小中学校も「小中学校の教育魅力化」を図り、島外からの留学生の受け入れを始めようとしている(表参照)。

小中学校が離島留学に取り組む利点は何なのか。3つの町村が考える利点はさまざまだが、大きくは「固定化された人間関係の打破」「部活動の活性化」「地元の児童・生徒・住民らが住んでいる地域の魅力を再発見する」「地域の活性化」などである。留学生が島にやってくることで学級や学校に良い変化が見られ、同時に家庭や地域に活気が生まれることを願っている。

しかし、離島留学の動きは「小中学校の教育の魅力化」を進めるためのひとつの方策に過ぎない。教育の魅力化とは、「学校の持つ魅力を最大限に発揮

すること。弱点を最小化すること」であり、そのための取り組みのひとつが離島留学なのである。

現在、離島留学に動き始めた3町村の教育委員会は、「われわれの島の教育の魅力は何なのか」をそれぞれで考え始めたところ。今後は、「自校の魅力とは何なのか」を小中学校と一緒に確認していく。

学校の先生方は目の前の児童・生徒のために目一杯の取り組みをしている。自校の教育の魅力は、未来に生きる子どもたちのことをイメージし、地域資源(ひと・こと・もの)をもう少し活用してみることで見えてくるのではないだろうか。今後は、学校・家庭・地域とともに、島まるごとで地域や島の教育の魅力について考えていく機会をつくっていきたい。そのきっかけのひとつが、離島留学になることは間違いない。

島前3町村の小・中学校における留学形態

| 町村名 | 留学名称 | 形態 | 募集学年 | 募集定員 | 契約期間 |
|------|--------|----|-------|------|---------|
| 海士町 | 親子留学 | 親子 | 小1～中2 | 1組程度 | 1年(継続可) |
| 西ノ島町 | しまっこ留学 | 親子 | 小1～中2 | 3組程度 | 規定なし |
| 知夫村 | 島留学 | 寮 | 小5～中3 | 8人程度 | 1年(継続可) |

(島前教育魅力化プロジェクト 社会教育主事 道川一史)

濱中香理 (はまなか かおり)

昭和51年海士町生まれ。平成14年より海士町役場に勤務。同27年7月から島前教育魅力化プロジェクトを担当。